東海道四谷怪談

鶴屋南北作

河竹繁俊校訂

「お岩様」の怪談として人に知られている『四谷怪談』は，「怪談もの」の傑作であるばかりでなく，歌舞伎脚本史上に「生世話物」の分野を確立した南北(1755－1829)一代の名作である。その作劇法の縦横の駆使と大胆な描写には驚くべきものがあり，特に《地獄宿の場》《隠亡堀》など，奇趣，陰惨を極めている。本書は新発見の原作本から校訂した。

黄213-1

岩波文庫

とうかいどうよつやかいだん
東海道四谷怪談

1956年 8 月 25 日　第 1 刷発行 ©
1990年 11 月 16 日　第 16 刷発行

校訂者　河竹繁俊

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111

定価はカバーに表示してあります　印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN4-00-302131-2

岩波文庫

30-213-1

東海道四谷怪談

鶴屋南北作
河竹繁俊校訂

岩波書店

凡例

一　「東海道四谷怪談」の覆刻活字本は、數人の校訂者によって約十種に達しているが、原本と對照していくと、その何れもにそれぞれの錯誤がある。本書の校訂には、もっとも信頼するに足る二種の舞臺使用本を底本とし、まったく新たに淨寫し校訂した。底本のことは解題にゆずることとし、校訂にさいしてのメモのいくつかをしるしておきたい。

一　原則としては、原本どおりを建前とした。けれども筆錄臺本のことで、狂言作者慣用の書きくせ筆くせがあるので、文庫本の性質にかんがみ、讀みやすからしめるため、以下に擧げる類のごく特殊な場合を止むを得ず變改した他は、言語表現もしくは話しことばとしては、一字一點も改めてないから安心していただきたい。

一　原本には全然句讀點を缺いている。けれども、そのままでは讀過に不便であるから、適當に「、」と「。」とを加えた。またルビも校訂者の責任である。

一　平假名書きがつづいて讀みにくい場合には括弧〔　〕して漢字をあてておいた。たとえば、

　　ごふぎ〔豪氣〕にあだ〔婀娜〕だな

のたぐいである。

一　江戸時代の狂言作者が慣用している漢字のあて字にも目なれない妙なのがある。それにも〔　〕をつけて、現代慣用の漢字を置いた。たとえば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

欠(駈)出す　聞(効)ます

といったふうである。

一　「ムる」「升」「ゟ」をそれぞれ「こざる」「ます」「より」にした他は、俗字・あて字といえども書き直さなかった。また變態假名及び活用語尾の片假名を平假名にした他は、間投詞や促音・撥音その他原文で片假名の用いてある個所は一切改めなかった。

一　本文の假名づかいは、舊假名づかいにしたが、振假名(ルビ)は新假名づかいとし、ルビは必要と思われる程度にパラルビとした。送り假名は多くはルビで間に合せた。

一　せりふの中に一畫分の大きな○を置いたのは「ト思入」とあるにあたる。從來の活字本には「○」を「ト思入」とか「……」としたものがある。今回は原本どおり○にしておいた。

目次

凡例

序幕……九

淺草觀世音境内の場。同宅悦住居の場。同裏田圃の場。

二幕……九三

雜司ヶ谷四ッ谷町の場。伊藤喜兵衞内の場。

三幕……一四七

砂村隱亡堀の場。

四幕……一六三

深川三角屋敷の場。寺町孫兵衞内の場。

大詰……二三九

蛇山庵室の場。

語釋……二七一

解說……二三五

東海道四谷怪談

五幕

序幕

浅草観世音境内の場
同宅悦住居の場
同裏田圃の場

〔役名＝民谷伊右衛門。小間物屋與七實は佐藤與茂七。奥田庄三郎。伊藤喜兵衛。醫者尾扇。藥賣直助。同藤八。四谷左門。通人文嘉。柏屋彦兵衛。大三つの升太。按摩宅悦。猿寺の桃助。砂利場の石。非人ずぶ六。同うんてつ。同目太八。乞食坊主泥太。伊右衛門妻お岩。お岩妹お袖。伊藤孫娘お梅。同乳母お槇。茶屋内儀お政。宅悦女房お色。地獄お大。〕

本舞臺三間の間、正面額堂、なげしに座元の紋付たる團子提灯を掛、茶見世の道具宜。上の方に楊枝みせ。こゝにおそで、古中形のゆかたを着て、ようじを拵てゐる。かたわらに庄三郎、こも冠りにて、めんつうを枕にしてねてゐる。額堂の内には文嘉、通人の形り、かしわや彦兵衛、店者のこしらへ、こちらのせうぎ〔床几〕へ猿寺の桃助、砂利場の石、地廻りの形りにて茶をのんでゐる。おまさ、茶やの女房にて茶をくんでゐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

る。そふばん〔双盤〕大拍子にてまくあく。

彦兵　かみさん、まひとつおくれんかへ。

まさ　ハイ〳〵だいぶおかはき被成まするな。

彦兵　ゑろふはしつてきたさかひ、かわきくさるわいの。

文嘉　かみさん、わたしやアゆるりとしやせう。

まさ　ハイ〳〵○。

トくんでくる。

桃助　桃さんもつと上よふか。

桃助　かゝとでふんづけてくんな。

石　コレ、大げへにのみやな。つらが湯氣にあがるハ。コウ、氣をよくしてゐると、おまんまを入れてくれろといふ。よいかげんにしやな。せつたいじやアねへよ。

桃助　べらぼうめ。せつたいといふが有物か。茶代は節句に水引でゆはへてもつてきておくのだ。

石　おつういやアがる。觀音樣の長いもじやア有めへし。

ト桃助、おそでの方をみて、

桃助　コウ、おま〔お政〕さん。あの子はいつから出る。石やみや。ごふてき〔豪的〕なもんだぜ。

石　ごふぎ〔豪儀〕にあだ〔婀娜〕だな。おらアはじめてみたぜ。

まさ　そのはづさ。あの子はきのふから、かはりに賴まれて出たが、よふじ見せ〔楊枝店〕にや

ア過もんだぜ。

桃助　ちげいねへ。粂三にそのまゝだぜ。イヨやま〔一〕〳〵。

石　よせへ、かわいそふだ。まぜつけへすない。

ト文嘉、彦兵衛、お袖をみて、

文嘉　なるほどあざやかだの。コウ、ありやア何か。月三兩の三月しばり〔二〕とでもいはざア、はなしがわかるまいの。

まさ　何サ、そのくせそふでもねへそふでござりますよ。

彦兵　ほんに、きようとひ物じやな。何と花三本〔三〕ぐらいではなしはよふ出けまいか。

まさ　さよふさ、出來ない事もござりますまいよ。

石　そんなら、ぢごく〔四〕をするか。

まさ　どふして。そんな事はしめへわな。

石　風がわるいと思つて、おらつちにはかくすの〳〵。

まさ　マア何、かくす物かな。本とふにかたいとよ。

石　しら〳〵しくおめへのよふに、うそをつくものはねへぜ。

桃助　年中、大筒の額の下〔五〕で商賣をしてゐるから、てつぽう〔六〕はあたりめへだろふ。

石　ほんに、てつぽうといへば、奥州のかりうどが、すてきな木兎をいけどつて來て、おく山〔七〕でみせるそふだ。

桃助　そふさ、この繪圖がそれよ。

彦兵　トはしらにかけてある繪圖を取てみせる。
　　是じやな。どゑらひ物じやな。
文嘉　何だ。丈の高さが五尺六寸、どふ〔胴〕の大きさが四寸二分といふは、大そふな木兎だの。
　　トみな〳〵立寄見る。そふばん、太鼓にて、向ふより喜兵衞、はかま、
　　大小、ふけたるこしらへ。おうめ、振袖娘。おまき、うばのなり。尾扇、
　　醫者にて、若イ衆の中間付添出來り、はな道にて、
喜兵　コリヤお梅。けふは大ぶ氣合もよさそふなが、あまりまた、を〔押〕して歩行致すにも及
　　ばぬ事じや。かごなと申つかはそふか。
うめ　イエ〳〵私はやはり是が宜うござりますれど、あなたさぞ、お氣まだるふ思召しとぞん
　　じまして。
まき　サア、何事も其樣に氣づかひ遊すのが、夫がやつぱりあなたの御持病。今日は御ほよふ
　　〔保養〕がてらの御參詣。御氣まゝに御ひろひ遊し、又御下向には、又何ンぞ、御きに入ツ
　　た御人形でも、大旦那樣へ御ねだり遊しませ。
尾扇　さよふ〳〵、とかくに其御病症には、御うつさん〔鬱散〕がかんよふ〔肝要〕でござります。
　　チトあれにて御休息遊しまするがよろしうござりましよう。
喜兵　いかさま。左樣いたそふ。サヽ、來やれ〳〵。
　　トみな〳〵舞臺へ來り、せうぎ〔床几〕へかける。
まさ　御出被成ました。

ト茶、たばこぼんをいだす。

まき　御覧遊ばせ。此よふにも御参詣の、たえず御くんじゆ〔群衆〕致ます觀音様はござりませぬ。けふは私もとも〳〵に御願がけ致ます程に、あなたにも、かの御かたに早ふ○。サア早ふ御利益にて、御本ぷく遊すよふに御信心遊しませ。

うめ　こちらが是程思ふてゐても、あなたの方にはよ所外に、又どの様な○。御みくじなと、とつてみやいのふ。

ト思ひ入。

まき　かしこまりました。私がのみこんで居まする。

尾扇　イヽヤ、又あまたの醫書をも見ひらひたる尾扇なれども、娘っ子の病氣を見定るはおんばにはしかずと、千金方にもろんじてござるて。まつたく是は戀わづらひと相見えまする。

ト おうめ、はづかしき思入。

まき　又尾扇さんの其様な事を。

桃助　石や、聞たか。あの御じやうさまは戀のわづらひだとよ。大方手前を思つてゐるのじやアねへか。

石　うさアねへ。戀のわづらひなら、瀧にうたせてみればいゝ。

彦兵　大切な錢金つかふてさへ、よふい〔容易〕に出けん物が、女子の方からわづらふ程にしたふとは、どこのわろか、えゝ月日の下にてうまれくさつたなア。

文嘉　こつちでよければ、御寐間の御とぎといきてへね。

桃助　モシ、おつういひなさるネ。

喜兵　たとへ戀やみで有ふ共、氣に入ッた男なら、金にあかしても聟にいたし遣すが、ハテ、當時出頭の師直様の御家來、伊藤喜兵衛が一人の孫○。ナニ尾扇老、うばもとも〳〵お栂が胸中、承つた上では、又いか様とも取斗ふて遣ふ程に、さよふ心得召され。

まき　かしこまりました。此義は私が又追て、申上まするでござりましよう。

尾扇　夫がよろしうござるテ、何事を仰出さりやうが、是が一つ、出來ぬと申義はござらぬて。少し御不快であれば、御ほよふの爲と思て、四谷町邊に御別莊をもおしつらひ被成、何ンでもあなたの御意しだひでござりまするて。

喜兵　イヤ、夫もまつたく、御主人師直公の、御はつめいと申、御武勇によつて我々にいたる迄、かく、かつけいくわんらくに、年月をも送ると申ものじや。みさつしやれ。我君に敵對いたせば、鹽冶殿の様に、家國をもうしなひ、家中の者共も、ちり〳〵と相成テ。さよふなうろたへた主人に、仕官致すも是も因緣。夫を思へば、めうが至極の身の上ではないか。

尾扇　左よふでござりまするて。

ト是を聞て、おそで、むねんのこなし。こもをかぶりし庄三郎も、額を上ておなじく思入。やはり鳴物に成、向ふより直助、藤八、藤八五文藥賣のなりにて、呼ながら出て來り、花道にて、

藤八　コレ直助。手めへけふは本郷から、板橋の方をながすといつたじやねへか。夫に又、な

ぜこゝをながすのだ。

直助　わたしはちつとこつちに用が有から、こふ〔斯う〕むけてきたのよ。

藤八　是かくすな。しつてゐるぜ。手めへ此頃じやア、山の女にかゝつて、うりだめも親方の方へやらねへそふだが、そんな事があつちや、外の賣子へも外聞が惡い。

直助　何サ。わたしやア跡月から、大山道者をあてに、川崎の方を流してゐたハ。其うりだめが谷中迄もつていかれる物か。いつか一チ度はもつていきやす。

藤八　おつう根〆をきめてゐるな。きめるといへば大三つで、一合きめよふ。

直助　そいつもよかろふ。

藤八　サア〳〵、行べい〳〵○。藤八五文。

直助　奇妙。

ト呼ながら舞臺へ來る。おまさみて、

まさ　一ツぷくのんでお出な。

直助　ハイ〳〵。

藤八　ヲイ〳〵、一ツくんな。

桃助　ハイ〳〵。

直助　ヲイ、こゝへも一ツくんな。

石　はい〳〵。

藤八　コウ、こりやア何ンにきくの。

桃助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton